

# 野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## クチナシ *Gardenia jasminoides* Ellis (アカネ科 Rubiaceae)

梅雨も終わりに近づいた頃、野山を歩いていると、民家の庭先などでほのかに甘い香りが漂い、あたりを見渡すと、白い花を付けたクチナシを見つけることがあります。クチナシは、本州の静岡県以西、四国、九州、南西諸島、台湾、中国の暖地にかけて分布し、野生では、森林の低木として自生、または庭園樹、切り花用、あるいは薬用するために栽植される常緑低木です。本植物は、高さ2~3m、多くの細い枝を出して茂り、全縁で上面に光沢のある葉は対生(時に三輪生)し、質はやや厚く皮革質です。6~7月頃、小枝の先に短い花柄を出し、径6~7cmで、盃(さかずき)状の大きな白い花を開きます。花は開花当初は白色ですが、徐々に黄色に変わっていきます。花冠は質が厚く6つに大きく裂け、裂けた部分は水平に開出し、筒部は長さ2cmほどで細く、強い芳香を放ちます。学名の種名 *jasminoides* は「ジャスミンのような」という意味をもちます。10~11月ごろ赤黄色の果実をつけ、果実は倒卵形またはだ円形で、縦に6本の稜翼があり、その先に6本の宿存がくを残し、熟すると橙赤色になります。クチナシの名の由来には諸説ありますが、果実は熟しても割れないため、「口無し」になったという説もあります。

果実をサンシシ(山梔子, *Gardeniae Fructus*)といい、消炎、止血薬とし、充血、炎症を去るとして黄疸、吐血などに用いられ、漢方でも同様の目的で、茵陳蒿湯、温清飲、黄連解毒湯、防風通聖散、竜胆瀉肝湯、五淋散などの多くの処方に使われます。成分はイリドイド化合物の genipin, その配糖体の geniposide, genipin gentiobioside, および gardenoside, shanzhiside, カロチノイド色素の crocin などが知られ、薬用としてはもちろん、食品にも用いられ、サツマイモ



写真3 クチナシ(花, 八重咲き)



写真4 クチナシ(果実)

や栗、和菓子、たくあんなどを黄色、若しくは青色に染めるのに用いられます。大分県の郷土料理・黄飯も色づけと香りづけにクチナシの果実が利用されています。その他、繊維を染めるのに黄色の染料としてもよく使われるそうです。生薬としては、長さ1~5cmで丸様のものを「サンシシ(山梔子)」、4~6cmで長様のものを「スイシシ(水梔子)」として区別しています。スイシシは長楕円形で、中間部がいくらか細くなっており、外面は赤みが薄く、一般に着色料に用いられます。*G. jasminoides* には多くの品変種があり、果実の色や形で呼び名が異なり、中薬志(中国)ではスイシシの基原植物は *G. jasminoides* Ellis f. *grandiflora* Makino (*G. jasminoides* Ellis var. *grandiflora* Nakai) とされていますが、近年の報告によると *G. jasminoides* Ellis f. *longicarpa* Z. W. Xie et Okada (長果梔子) と命名されています。



写真5 生薬:サンシシ(山梔子)【左:サンシシ(丸様), 右:スイシシ(長様)】

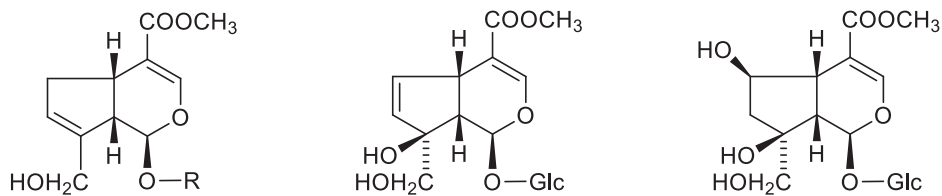
クチナシの果実に穴が開いていることがありますが、これはイワカワシジミの幼虫の開けた跡だそうです。また、将棋盤や碁盤の四本の脚はクチナシの果実をかたどっており、打ち手は無言、他人の口出しも無用、すなわち「口無し」を意味しています。



写真1 クチナシ(花)

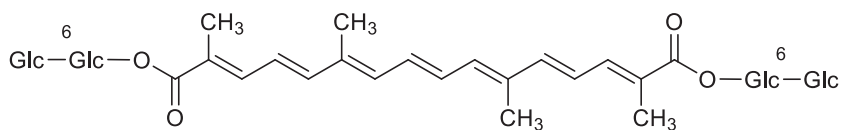


写真2 クチナシ(花, 開花後, 日が経ち花が黄色くなったもの)



	R		
genipin	H	gardenoside	shanzhiside
geniposide	Glc		
genipin			
gentiobioside	gentiobiose		

Glc = glucose



crocin

図1 成分の構造式